

ベトナムにおける考古遺跡発掘調査の活用例 ～キムラン歴史陶磁器博物館の建設～

西野 範子

国際文化資源学研究センター 客員研究員

本報告は、金沢大学フィールドマネジャー養成プログラムのもと、2011年1月24日から2011年3月2日にベトナムに滞在し、ハノイ市キムラン社バイハムゾン遺跡（図1）において調査研究した遺跡を活用し、研究が社会にいかに関与できるのかを考察、実践したものである。



図1 キムラン社バイハムゾン遺跡
（紅河沿いに位置し、夏期は水没する）

1. これまでの経緯

2000年4月、キムラン社の古老たち Nguyễn Việt Hồng らの歴史研究会グループ（図2）が、村の紅河沿いに位置するバイハムゾン地点（図3）で、多量の陶磁器片と銅銭を発見した。古老らはキムランで陶磁器を生産したのではないかと仮説をたて、ベトナム考古学院や歴史博物館に情報をおくり遺跡調査を依頼したことが始まりである。紅河に面するキムラン社バイハムゾン遺跡は夏の雨期になると、水位上昇により水面下となり、流水の圧力で川岸が削りとられるため、まず、考古学院と東南アジア埋蔵文化財保護基金により発掘調査が実現した（2001および2003年）。その結果、キムラン社で李・陳朝期の高級陶磁器が出土し、ベトナム歴史博物館も発掘調査を行うこととなった。



図2 キムラン社古老による歴史研究会



図3 キムラン歴史陶磁器博物館と発掘地点の位置

発掘調査により、キムラン社は8,9世紀より本格的な居住が始まり、李、陳朝期には高級な陶磁器を生産したことが明らかになった。図4は14世紀後半の陶磁



図4 キムラン、バイハムゾン遺跡出土の高級陶磁器

器で、上からベトナム鉄絵菊花大碗、青磁蓮花刻花文深鉢、輪花菊花文碗、鳳凰文青花大盤である。15世紀半ばごろには洪水などが理由で、一時的に居住が行われなくなっている。16世紀半ばより17世紀まで再び居住し、今度は青銅鑄造などをしていたことが明らかになった。

西村昌也氏（東南アジア埋蔵文化財保護基金代表）がバイハムゾン遺跡発掘調査報告会を村落内で行っ



図5 キムラン歴史陶磁器博物館の建設予定地



図6 建設予定地の隣のキムラン社主廟

たところ、5000人の人口村において1000人が参加した。村人の熱心さを見て、博物館を建設しようという話が持ち上がった。これらの経緯については、金沢大学国際文化資源学研究センター発行の『テキスト文化資源学』に記されているので参照されたい（西村・西野2011）。キムラン社人民委員会の熱心な協力のもと、博物館の建設場所として、社の中心である人民委員会（村役場）敷地内の土地を提供していただいた。そこは1954年以前、ディン（集落の公共活動を行う伝統信仰建築）の建築があり、土地改革後は村の学校が建設されたところである。その後、別地に小学校が建てられ、現在では未使用の建物となっていた（図5）。隣には、村の主廟が建っている（図6）。

多額の予算を使う大土木事業を目指すのではなく、この村落に相応しい博物館を作ろうと、このプロジェクトに理解して下さる方々に寄付金を募り、合計約30000ドルの建設費を集めた段階で、キムラン村歴史陶磁器博物館建設費贈呈式を行った（2007年11月：図7）。式典には、キムラン村人約600人が出席する中、日本、ベトナム双方各界の著名な方々にご列席いただ

き、特に、関西や名古屋からの財界および文化界から建設資金ご寄付の団長として、中山成彬衆議院議員(当時)、副団長として江本孟紀元参議院議員(野球評論家)、服部則夫在ベトナム特命全権大使(当時)、ゴートータインハン、ハノイ市副市長、グエンミンハー在日本ベトナム公使(当時)にご列席いただけたことはとても意義深いものであった(図8)。皆さんに挨拶をいただき、ガジュマロの木の記念植樹を行った(図9)。ガジュマロは1000年は生きるという寿命の長い



図7 建設資金贈呈式会場・博物館建設予定地の入り口にて



図8 建設資金贈呈式



図9 ガジュマロの木の記念植樹

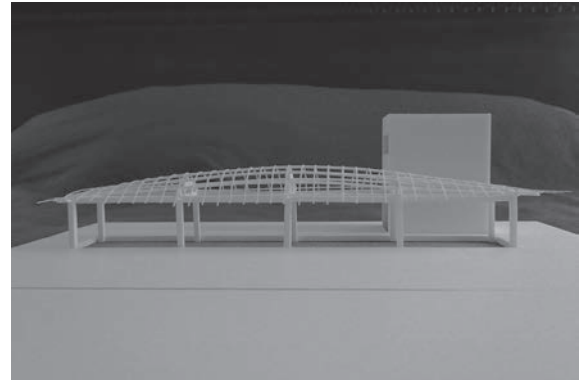


図10 大田省一氏による博物館設計模型



図11 現在のキムラン村の煙突窯

木で、日越のこれからの長い友好を願って、キムラン社が用意してくれたものである。

設計は、アジア建築史研究家の大田省一氏に依頼し、図10のような博物館を設計していただいた。バッチャンで20世紀前半まで使用した単房室登窯と、煙突の部分、現在のキムラン村にある煙突窯(図11)をイメージした設計である。

しかし、2008年のインフレで物価が2倍近く上昇することにより、資金が不足し、不足分はキムラン社人民委員会がハノイ市に申請して予算を獲得することができた。

当初の大田氏の設計では、登窯的印象を出すために床面を一段低く掘り込む案が提案されていたが、ベトナムの湿気の高さと洪水による浸水の心配から、床面を地面より一段高くしてもらうように依頼した。そして、2010年5月より、大田氏の設計や模型図を基にベトナム側建設家が建設を施工はじめたのである。ハノイ市に助成金申請を行うため早く設計図を提出しなければならないことから、図12のベトナム人が描いた図が用いられた。しかし、床面を高くしたことで、建物の高さが幅に比べて大きくなり窯の雰囲気ができな



図 12 大田氏作成した模型と設計をもとに
ベトナム建築家が設計した図

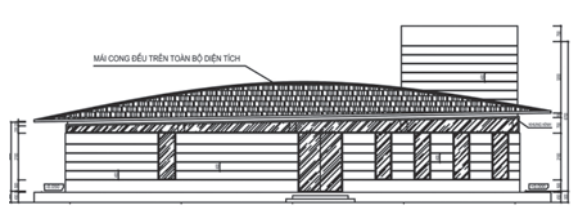


図 13 大田氏が修正した設計図案

くなくなってしまったため、大田氏から、建物の下部周辺に縁側のような段を入れようと提示があった。最初は高い段が想定されたが、子供が落ちて危なくないような高さにしてもらった。また、窓のスタイルを（図 13）のように、天井の下に横一列の明かり取り窓を入れ、その下に縦長の窓を設計し、登り窯のイメージを表現するために屋根は右上がりになるように設計図を描いていただいた。

しかし、人民委員会は、施行にあたりハノイ市に提出した設計図ですでに建設を進めており、筆者が視察した際は、図 14 のように屋根部まで建設が進んでいた。大田氏の修正案への変更を求めたが、窓部を変更するためには下部まで破壊しなければならない。また、当初の設計図は大田氏の設計に比べてスタイルの面で劣るものの、湿気が多いハノイにおいて、窓を明けて換気するという面においては利点をもっているため、窓は現状でいくこととした。しかし、屋根が右上がりになるように建設者に修築を依頼した。すでに屋根の建設が半分以上進んでいたが、建設者側は修正案を受け入れ、やり変えてもらうことで同意してもらえた。それでもまだ建築物に単房室登り窯の雰囲気がないため、西村昌也氏の提案により、屋根の下に右上がりの屋根が強調できるように、従来大田氏が屋根の下に窓を入れていた所にえんじ色のレンガを使用し、登り窯の雰囲気を出すために、足下にも右上がりの段上の



図 14 建築中の博物館

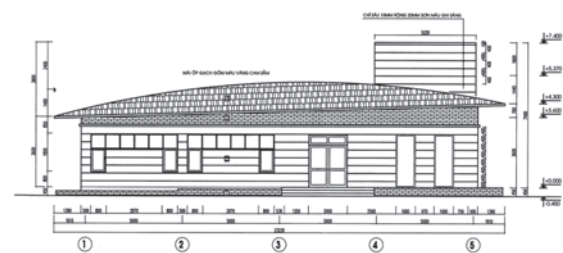


図 15 西村氏による修正案図



図 16 内側の天井部建設最中

階段を構想した。提案をベトナム側の建設者に伝えた。図 15 は西村氏の修正案図である。足下の段には、キムラン社の窯に使う耐火土レンガを使用するよう依頼した。

内装の天井はアーチ状の予定であったが、直線的な天井になっており、これも修正をお願いした。その時分かったのだが、屋根には、陶磁器焼成時に使用する練炭の焼成滓を敷き詰めるという。それによって、夏の炎天による熱を防ぐというのである。焼成滓を支えるにはアーチ状構造は弱くて実現がやや難しいということであった。

このような紆余曲折を経て、博物館の建設中のさなか、文化資源学の実践のためのフィールドマネジャー

プログラムでの滞在が始まることとなった。

2. 2011 年度フィールドマネジャープログラムでの活動

本年度のフィールドマネジャープログラムの目的は、建築物を最終的に完成させること、および展示内容のコンセプトを再考し、より文化資源を活かすための展示に向けて、調査、考察を行うことである。

2.1 建設物について

1 月末日には、建設物の骨組みはほぼできあがっているが、屋根瓦がまだ張られていない状況であった。最初、ベトナム伝統建築によく使われ李陳朝時代より歴史のある平形尖状施釉瓦を使用する予定であったが、博物館に見合う釉色が見つからず、屋根瓦の実見のため、ハノイ、カットリン通りでの瓦のサンプルを購入しに行った。西村氏の意見では、全体のバランスとして濃く締まった色のほうが良いということで、筆者らを選んだのは、暗灰色の薄い石製板瓦である。人民委員会の主席チュエン氏に見せにいくと、「この瓦

は、ハノイオペラ劇場にも使用されたものであり、当然これはいい瓦だ。」という意見であった。しかし当然、値段も高く予算的に心配されたが、チュエン氏が建設家に話し、無事同意してもらえた。完成直前の博物館は、当初、大田氏が設計した図面とは窓のスタイルが異なっており、大田氏に建設中博物館の写真を送り、確認をとったところ、新案として建築物の外観をより効果的に見せるため博物館外側に格子風の装飾を足した修正案が提示され、人民委員会の主席に相談した。主席は経費不足もあるが、旧案のほうがより窯のスタイルに近くていいということで、現状のままでいくことになった。また、壁の色が白色に塗られ、風景との調和がとれなかったため、カラーサンプルを提示し、淡い灰色に変更依頼した。

設計から建設にいたるまで、建築家、ベトナムの建設業者、ベトナムの建築家、キムラン社人民委員会と何度も調整にはいらなければならなかったが、窓の形と内側の天井部を除き、大田省一氏が設計した建築物が完成することになった。防犯対策のために、窓に格子が入れられており、外見がややうるさくなくなったが、安全性を重視し受け入れた。図 17、図 18



図 17 キムラン歴史陶磁器博物館 外観



図 18 キムラン歴史陶磁器博物館 内観



図 19 新たに作った壁



図 20 キムラン村の村人から寄贈された陶製絵

はキムラン歴史陶磁器博物館の外観と内観である。

また、キムラン社在住の陶工より、キムラン歴史陶磁器博物館に巨大な陶製絵が寄贈された。しかし、飾る場所が博物館の中になく、新しく壁を作ることで人民委員会と当基金とで同意し、実行した。

2.2 展示室について

2.2.1 ベトナムにおける展示の参考例

建設物はほぼ完成したが、展示については一からのスタートであった。文化資源学の視点から、キムラン歴史陶磁器博物館のコンセプトを再考した。ベトナム民族学博物館、ハノイ歴史博物館の展示ケース（図21・22）など再度視察し、ベトナムで作成可能な展示ケースや照明などを検討した。

博物館訪問者として展示を見たとき、「物」に対して相応しい説明があることが、展示物の背景を理解できると同時に文章だけでは理解できない実物からの情報を訪問者が考えられる展示がいい展示であると認識した。また、図23のような模型により、訪問客がイメー



図21 歴史博物館の展示例1



図22 歴史博物館の展示例2

ジを膨らませることができる展示も重要である。

2.2.2 キムラン歴史陶磁器博物館の訪問客の対象

キムラン社に北接するバッチャン社には、外国人観光客、およびベトナム人訪問客が多く訪れるため、バッチャン-キムランというコースで、このキムラン博物館を村の観光資源とし、観光開発や村おこしの一環としたい。また、観光客にとっても、従来、旅行でバッチャンの窯元を訪ねるという単純な買い物観光だけでなく、土地の歴史、文化を深く理解するための施設となるように工夫するつもりである。

しかし、何より重要なことは、村の住民が有意義だと思える内容の博物館を作り、村の人々がこれから長きに亘って、大切に運営してくれるような博物館にすることである。また、筆者らのような外国人が博物館を作るというメリットを活かし、キムラン村の世界の中での位置付けが見えるような展示を作成したい。同時に現代の陶工の作陶活動を活性化するためのコーナーを設ける。

今回、若者への聞き取り調査で、ジェネレーションギャップに対して問題を感じた。ベトナム村落の古老にとって、周知である歴史や文化について若い世代が全く知らないということが顕著である。その理由として近年の核家族化により、3世代で生活することが少なくなり、また多世代で生活している場合も、大学進学や受験準備や補習などで子供たちが多忙で、古老から「村のこと」について語り継がれなくなっている。従って、この博物館には、現在古老達が持っている見識を次世代に伝えるという目的も重要な目的の一つにしている。2011年には、キムランに関して、筆者を含めた3人の本、論文が出版されている。Tran



図23 模型の展示例（ベトナム民族博物館）

Van My 氏の書籍『キムラン村の昔と今』（ベトナム語）が詳細にキムラン社の歴史的地誌を描き、西村昌也氏が『ベトナムの考古・古代学』の「ベトナム集落の形成：キムラン川べり手工業専業集落の考古学・歴史地理学からの理解」において考古資料、歴史資料、伝承など様々な視点からキムラン村の形成過程などについて描き、著者が、キムラン村の陶磁器生産の技術史と歴史的背景について『考古学と陶磁史学 佐々木達夫先生退官記念論集』の中の「ベトナム北部の窯業集落、キムラン・バッチャンの窯業技術研究～現在から過去に遡る 20 世紀の製作技術の変遷史とその要因～」で詳細に述べている。当該本や論文も博物館展示の参考資料にする予定である。

2.2.3 参考にしたい展示館「長登銅山文化交流会館」

展示室を作成する際に、筆者が非常に感銘を受け、参考にした展示室を紹介したい。2010 年 1 月に訪れた山口県美弥市美東町に所在する「長登銅山文化交流会館」の展示である。小さい展示室であるにも関わらず、原料の銅を展示し（図 24）、そこから、長登の歴史や世界との関わりについて図化したパネルが非常にわかりやすく世界が見えるような展示となっていた。そして、発掘調査の出土品や発掘層位の展示（図 25）、鑄造、銅の使用に関する展示という、銅にまつわる採掘から使用までの一連の流れ（図 26）を限られた場所、資料の中で体系的に理解出来るように展示されていた。

2.2.4 キムラン歴史陶磁器博物館の展示コンセプト

上述のようなアイデアを取り入れ、キムラン歴史陶磁器博物館では、以下のようなコンセプトの展示を考えている。

- a. キムラン社の発掘調査におけキムラン、バイハムゾン遺跡の出土品や研究成果の展示。各時代を追って、遺物と遺構、およびその歴史的認識を加えた展示を行う。
- b. ベトナム陶磁について、全世界を俯瞰して捉える。ベトナム陶磁は、14 世紀半ばから 17 世紀後半までアジアを中心として世界各地に輸出されており、各交易関係についてパネル展示を行う。
- c. アジアの各地域の陶磁器を展示する。アジアの各国で生産された陶磁器やその生産窯、使用法について、展示、説明し、陶磁器を巡る文化史について展示する。



図 24 長登銅山文化交流会館展示例 1



図 25 長登銅山文化交流会館展示例 2



図 26 長登銅山文化交流会館展示例 3

- d. キムラン社の歴史について、歴史的文献や寺、廟などの資料から、村の歴史を復元し、キムラン村の民俗誌について説明する。
- e. 現代のベトナムの窯業技術工程、及び聞き取り調査可能な近過去の陶磁器の技術史を提示する。
- f. 村の陶器生産産業を発展させるために、現代陶芸家の作品を展示し、「芸術としての陶磁器」や「日常生活の美を追究した陶磁器」というコンセプトを理解してもらえるようなものとする。

2.2.5 フロアマップ

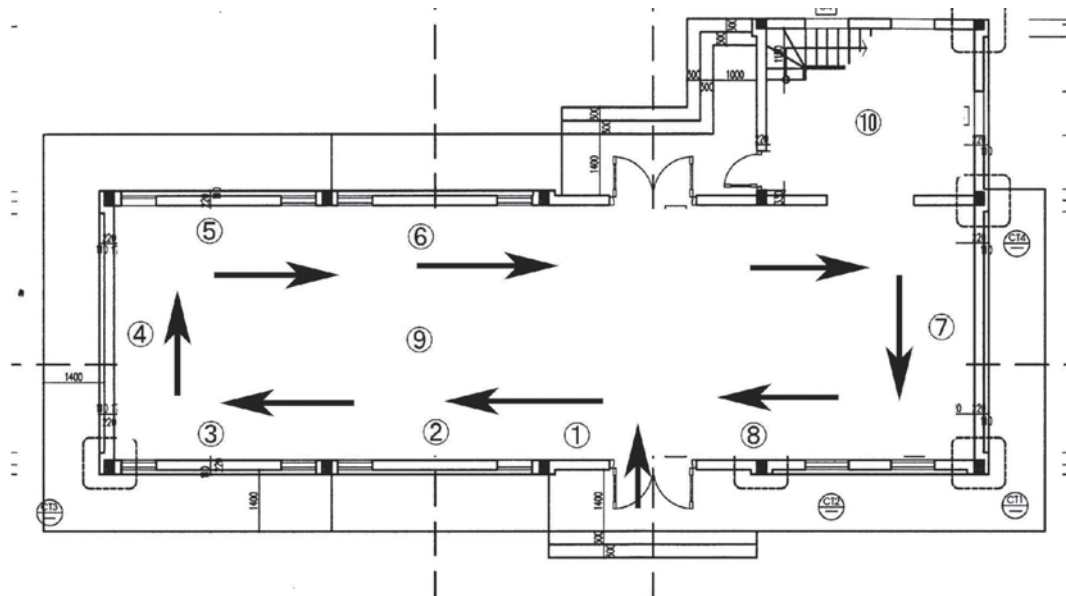


図 27 フロアマップ

上述のような、コンセプトと、各博物館の展示例を参照にして、図 27 に示したようなフロアマップを作成した。(図 27 の①から⑩に対応する)

展示参観は、入り口から入って左回転に一巡する。

- ①パネル「はじめに」:この博物館が建設されるに至った経緯について説明する
- ②展示ケース 1:「キムラン村の発掘調査の成果 1—キムラン社への居住はいつから—」北属期から李朝まで
- ③展示ケース 2:キムラン村の発掘調査の成果 2—陳朝期について
- ④展示ケース 3:ベトナム陶磁の世界
- ⑤展示ケース 4:アジアの土器・陶磁器の世界
- ⑥展示ケース 5:キムラン村の歴史と文化
- ⑦展示ケース 6:現代の陶磁器生産工程、現代陶芸作家の作品の展示と作家の紹介、工房の写真など
- ⑧体験コーナー
- ⑨窯の模型
- ⑩ 2 階建て。2 階部は収蔵庫。

3. まとめと今後の展望

ようやく博物館の建築物が完成したわけだが、最初に設計図を提示した段階から完成にいたるまで、何度も現場に足を運び、点検を行って問題点を常に修正していくことの大切さを強く認識した。最初のプランが最後まで変わらずに使えるわけではなく、状況に見

合った改変を行っていくことが必須である。

来年度は、展示室が完成する予定である。さらに今後、村人自身がキムラン歴史陶磁器博物館を運営していくための、文化遺産マネジメントについて考察したい。

引用文献

- 西野範子 2011「ベトナム北部の窯業集落、キムラン・バッチャンの窯業技術研究～現在から過去に遡る 20 世紀の製作技術の変遷史とその要因～」『考古学と陶磁史学佐々木達夫先生退官記念論集』金沢大学考古学研究室、286-326 頁
- 西村昌也 2011『ベトナムの考古・古代学』同成社
- 西村昌也・西野範子 2011「ベトナムにおけるパブリック・アーケオロジーの実践 10 年間の活動経験から生まれた経験則」『テキスト文化資源学』金沢大学国際文化資源学研究センター、29-39 頁
- Tran Van My 2011 *Trần Văn Mỹ Làng Kim Lan xưa và nay*, Nhà xuất bản văn hóa thông tin